

カルナッソスの出身、数学者・哲学者のピタゴラスはサモスという町の出身など、地域の上でも階層の上でも、多様な人が集まってアテネを作り上げたのです。そんなアテネの町で多様な人々を統一していた精神性は、理性でした。

一方、彼らはそれぞれ違った町の感性を身につけており、それらが統合された時にあの偉大な町が誕生したのです。つまり、大都市は見知らぬ土地からやって来た人々の集まりであるために、他人の目やしがらみなどを気にする必要がなく、個人の多様性が発揮しやすくなります。そうして新しい流行や文化などが生まれ、連動して新しい商品購買傾向も発生するなど、無名性だからこそお互いが影響し合い、集団となって作り上げるある種の力が自然発生的に生まれます。東京でも、東京以外の地域の人たちが一旗揚げようと集まり、その結果、さまざまな文化を生み出してきました。さらにはその文化を評価する力も高まったのです。じつは、これが大変大事なことなんです。メトロポリスにふさわしい文化の条件の二つ目は、“このまちで誉められたら一流だ”“世界に通用する”と思わせるような、評価機能を持つことなのです。

大阪の権威の失墜

三つ目の条件は、都市には見えざる権威が存在しなければならないということです。そうした観点から大阪を振り返ると、残念ながら大阪にはメトロポリスにふさわしい文化の条件が整っていません。ここでの大阪とは大阪市を指しますが、ここには権威になるようなものがないのです。どの文明でも権威の中心には大学があります。大学では、学問、文化、芸術が集中して養われることで、権力で侵すことができないある種の権威が生まれます。権力が芸術活動を抑えるようなことがあれば、これは問題です。しかし、今では大阪市内



には大阪市立大学しかなく、代表的な私学もすべて市内からなくなりました。府県を中心都市でありながら大学がないのは日本中で唯一でしょう。また、国公立の音楽ホールや劇場もなければ、出版社もない。新聞社に関しては、大阪にはたくさんの大新聞社がありますが、実質的な紙面づくりはほとんどが東京集中です。

真の大阪らしさとは

お叱り覚悟で申しますが、大阪人の感性・考え方がこうしたメトロポリス的なものを嫌う傾向があります。反権威主義と申しますか、気取ったものは嫌いだという大阪特有の気風なのでしょう。しかしながら、じつは大阪の町人は江戸時代、あるいは第二次世界大戦以前は、大いに気取り屋さんでした。おしゃれも好きでしたし、芸能文化も大好きだった。とりわけ学問が大好きで、懐徳堂という自前の大学さえ作っていた。しかし残念ながら、戦後は京都の公家文化や東京の武家文化の気取りを快く思わず、大阪は町人の町だと固執したばかりに、気取らないことが大阪人の誇りになってしまったのです。

そしてもう一つ、かつて大阪は、大阪文化を復興し経済を立て直そうと、「すきや

ねん大阪」というスローガンを掲げました。たしかに大阪生まれ育ちの人たちならこれで十分満足できるでしょう。しかし、大阪には府外から来た人も多く暮らしており、その人たちは「好きやねん」という言葉を聞かされて、自分たちは阻害されていると感じたかもしれません。少なくともこの言葉で守れるものは、『ふるさと一番』の文化であって、メトロポリスの文化ではないのです。

新・摂津の国の復活

そこで私はみなさんに一種のショックを与えるために、あえて暴論を申し上げたい。それは、しばらく大阪という単位を忘れてみようではないかということです。少し視野を広げてみれば、案外救いがあります。それが「摂津の国」の復活です。

摂津とは大阪と兵庫の海岸地帯を含む三角形の領域を指し、8世紀の頃はすでに延喜式にも登場するなど大変古い歴史があり、当時は自ら市場を開いたり、度量衡を決める権限さえ持っていました。近世は豊臣秀吉も一目置いた商業が盛んな場所になり、近代では神戸の方からジャズや写真など、西洋文化を導き入れる入口にもなりました。そのような歴史あ